

補足資料

1. シームレス地質図V2の凡例 を取りまとめたマップの作成

◆ 工学的岩盤分類

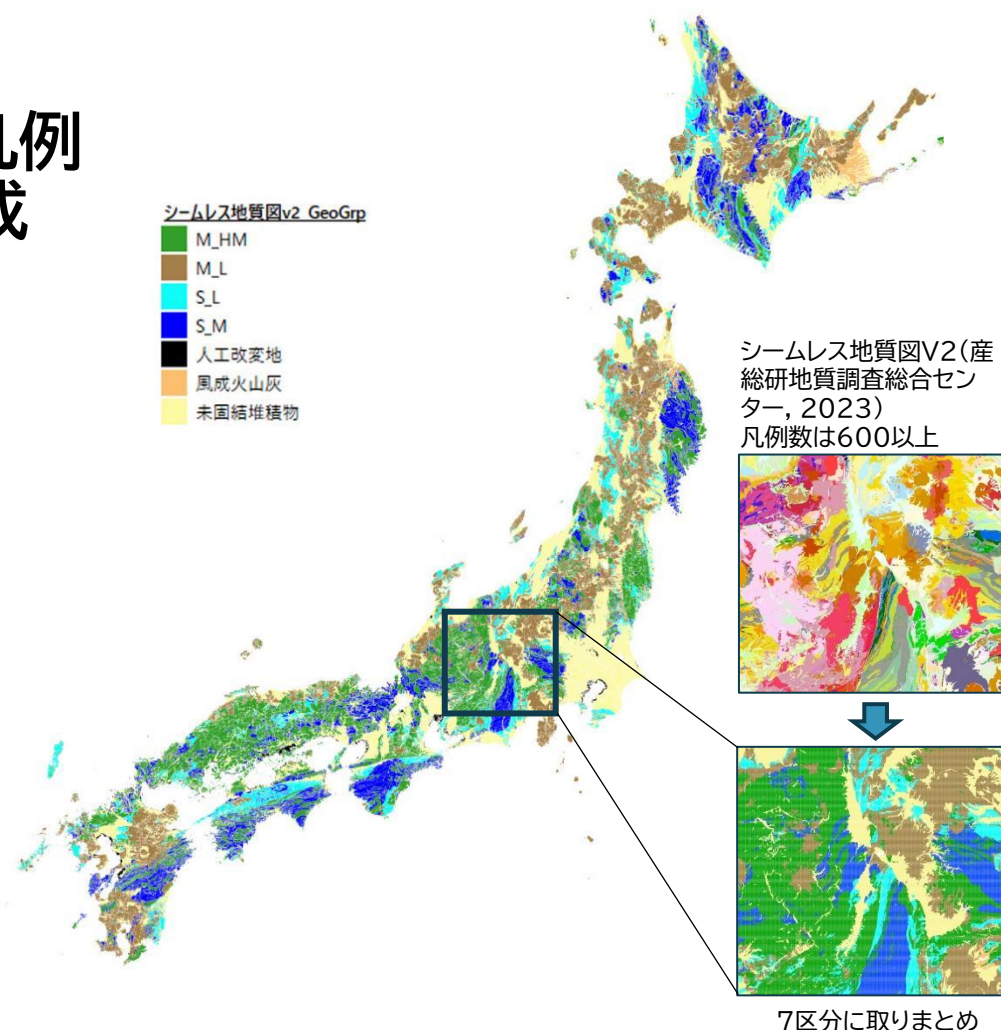
硬さによる分類と塊状・層状(葉状)など剥離しやすさを組み合わせた分類が一般的

シームレス地質図V2(産総研地質調査総合センター、2023)を、道路トンネルの地山分類における岩石グループ(日本道路協会、2003)を参考にグルーピング

◆ 地震時の脆弱性

崩壊性地すべりの発生域(国土交通省砂防部、2024)、令和6年能登半島地震の斜面崩壊を考慮

→中新世以降の火山岩・火砕岩、層状の堆積岩



(岩橋ほか、2026)

工学的岩盤分類を考慮してシームレス地質図V2をグルーピングした地質区分 (GeoGrp)

1.塊状岩盤 (M)

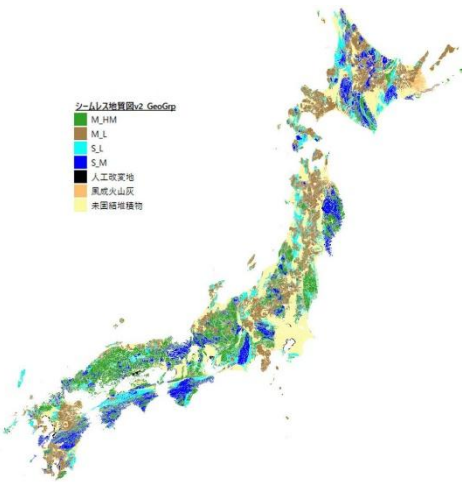
HM (硬質岩・中硬質岩)	L (軟質岩)
(M_HM) はんれい岩、かんらん岩 閃緑岩、花崗閃緑岩、花崗岩 玄武岩、安山岩、流紋岩、粗面岩 マイロナイト グラノフェルス 角閃石岩 片麻岩 チャート 古第三紀以前の火砕岩・火砕流を含む地層 古第三紀以前の砂岩、礫岩、シルト岩 古第三紀以前の海成層崩壊堆積物 第三紀以前の石灰岩	(M_L) 蛇紋岩 超苦鉄質岩 新第三紀中新世以降の火砕岩を含む地層 新第三紀中新世以降の大規模火砕流 新第三紀中新世以降の砂岩、礫岩、シルト岩 新第三紀中新世以降の海成層崩壊堆積物 第四紀の石灰岩

2.層状岩盤(S)

M (中硬質岩)	L (軟質岩)
(S_M) 粘板岩 古第三紀以前の泥岩、砂岩泥岩互層、 混在岩 その他(L以外)の片岩	(S_L) 千枚岩 泥質片岩、苦鉄質片岩 新第三紀中新世以降の泥岩、砂岩泥岩互層、混在岩 第四紀更新世ジェラシアン期～前期チバニアン期の堆積岩

3.その他

人工改変地	風成火山灰	未固結堆積物
盛り土 埋立地 干拓地	風成火山灰 (テフラが薄く 堆積している範 囲とは異なる)	第四紀更新世後期チバニアン期以降の堆積岩 段丘堆積物 岩石なだれ堆積物、地すべり堆積物 火山麓扇状地堆積物、扇状地・崖錐堆積物 氷河堆積物 湖沼堆積物、湿原・湿地堆積物 谷底平野・山間盆地・河川・平野堆積物 自然堤防堆積物 海岸・砂丘堆積物



(岩橋ほか,2026)

2. DEM地形分類図※の凡例 を取りまとめたマップの作成

※J_Terrain16_V2 (Iwahashi, 2025)

30mDEMから傾斜・落水線からの比高・尾根谷密度等を用いて
類型化した地形分類図

◆ 地盤、土層厚

山地斜面の形態分類には、おそらく表土の状況を間接的に
表したり、斜面の脆弱性を間接的に表す側面がある

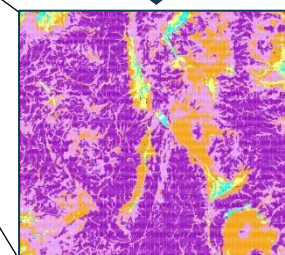
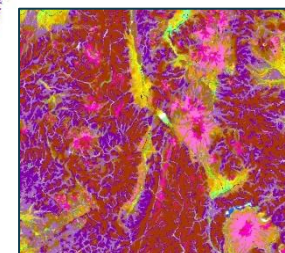
日本のような造山帯では、谷密度が低い長大斜面と凹凸の
多い斜面では地盤状況が異なる

・30mDEM地形分類図(Iwahashi et al, 2021)は森林
土壌デジタルマップ(森林総合研究所)の表層土壌に関する
土壌特性値、土層厚の推計に使用実績あり。

・同種のグローバルなDEM地形分類図(Iwahashi and
Pike, 2007; Iwahashi et al., 2018; Iwahashi and
Yamazaki, 2022)は各国でVs30マップや斜面崩壊、土
壌などの推計に使われた実績あり。

- 1 山地
- 2 丘陵性山地
- 3 丘陵化した段丘・開析谷等
- 4 段丘・扇状地等
- 5 立降
- 999 高い盛土

DEM地形分類図
J_Terrain16_V2
(Iwahashi, 2025)
凡例数は16

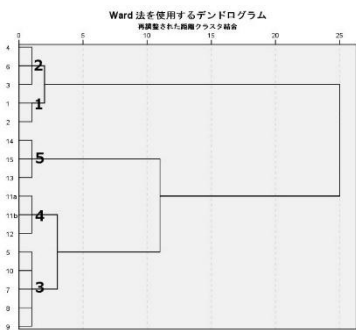


6区分にりとまとめ

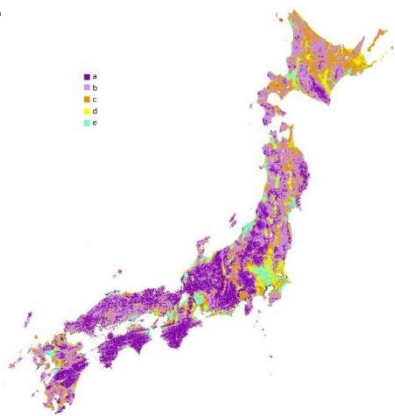
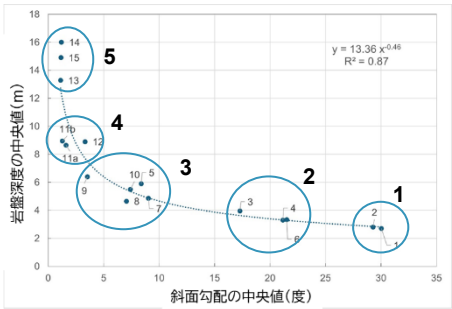
(岩橋ほか, 2026)

岩盤深度と傾斜を考慮してDEM地形分類図をグルーピングした地形区分 (TerrainG)

Terrain G	概要	含まれる主な地形種	J_Terrain_V2の凡例 (番号)
1	山地	非火山性の大起伏山地	1, 2
2	丘陵性山地	丘陵, 凹凸の多い火山斜面, 地すべり滑落崖	3, 4, 6
3	丘陵化した段丘・開析谷等	開析段丘, 凹凸の少ない火山斜面, 地すべり土塊, 山地・火山地の谷, 段丘崖	5, 7, 8, 9, 10
4	段丘・扇状地等	段丘, 扇状地, 高い砂州, 谷底平野	11a, 11b, 12
5	平野	自然堤防, 低い砂州, 氾濫平野, 湿地, 湖沼跡	13, 14, 15
999	高い盛土	埋立地, 高い線状盛土	-



J_Terrain16_V2 の各凡例について、傾斜と岩盤深度の中央値をキーに階層クラスタリングによってグルーピング



補足情報

3. 平野部の災害危険個所に関する補足マップ

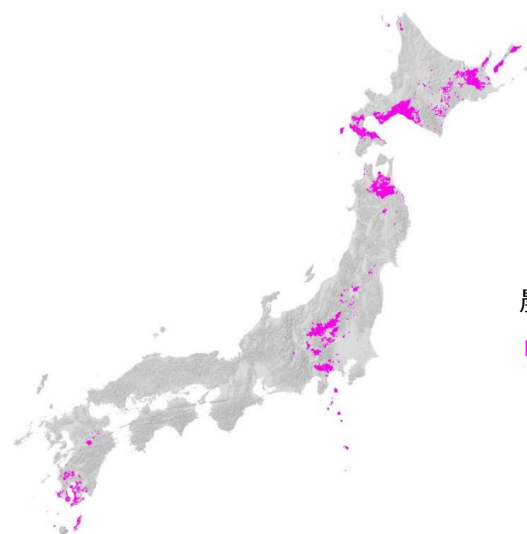
土砂災害特別警戒区域(国土交通省, 2024) ※R5年度時点

◆住居近くの急斜面: 住居周辺については、250mメッシュで表現しきれない急斜面を補足

4. テフラに関する補足マップ

崩れやすいテフラが急斜面上に薄く堆積している箇所(テフラ層すべりの可能性がある斜面)

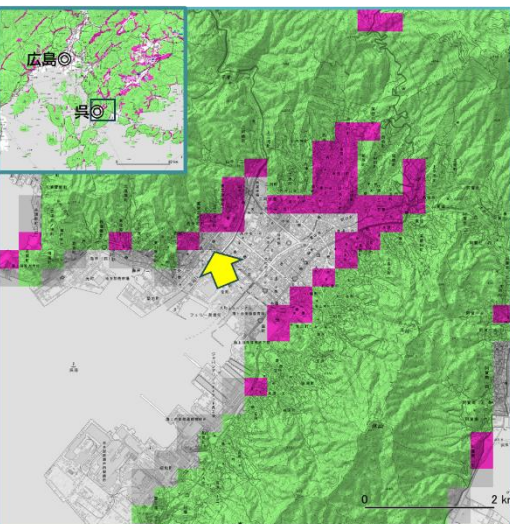
◆新規火山灰: 地質図には反映されていない、DEM地形分類でも補足できていない → 土壌図である程度補足できる



農研機構 20万分の1土壌図(土壌インベントリ) (抜粋)

■ J1 (火山放出物未熟土) および

D1 (未熟黒ボク土)



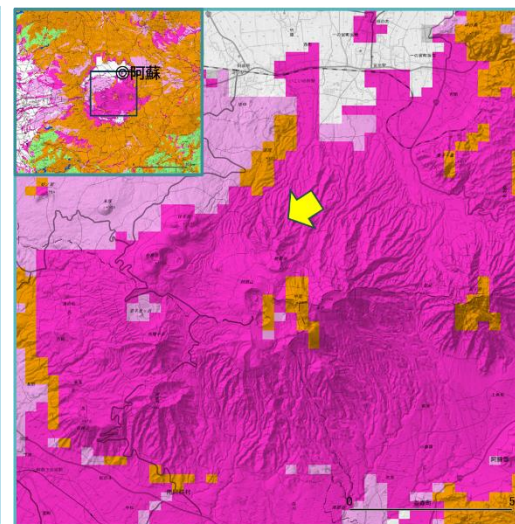
□Zone0/■Zone1

沖積平野・段丘面・沖積扇状地等の緩勾配な領域が過半、なおかつR5年度時点の土砂災害特別警戒区域をセル(1/4地域メッシュ)に含まない(0)/含む(1)

◆ 緩斜面が広がり斜面崩壊の発生可能性は低い、一部小規模な崖では崩壊発生があり得る斜面をイメージ

◆ 事例

・2001年芸予地震:Zone2との境界付近での斜面崩壊



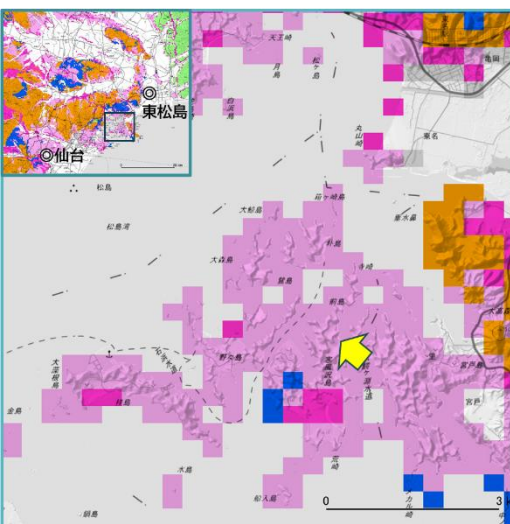
■Zone2

未固結層による山地・丘陵性山地～丘陵化した段丘、あるいは比較的新期のテフラ起源の土壌が山地・丘陵等にかかる斜面(火山灰被覆丘陵)

◆ 未固結層のみが面的に動く可能性のある斜面をイメージ

◆ 事例

・2016年熊本地震:仙酔峡、烏帽子岳南
・2018年北海道胆振東部地震:厚真川周辺、本郷地区
・2024年能登半島地震:金沢市田上新町の崩壊等



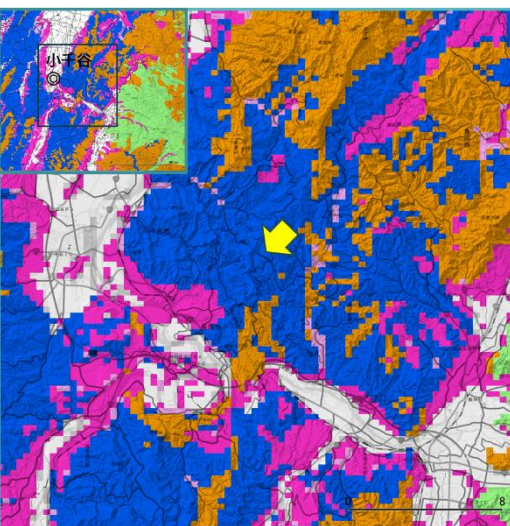
■Zone3

軟質岩による丘陵化した段丘・開析谷等

◆ 大起伏山地ではなく、テフラ層すべりの可能性も低い、強震動に対して脆弱な斜面を一部内包するイメージ

◆ 事例

・2011年東北地方太平洋沖地震:松島湾周辺(※解像度の問題で内包されている小さな急崖)
・(稀な事例として)2016熊本地震:高野台地区等(※Zone2でフォローできていない火山灰土の分布域)



■ Zone4

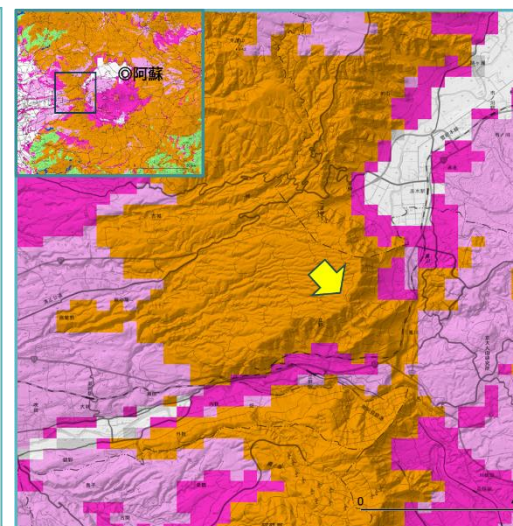
層状岩盤の軟質岩による丘陵性山地

◆ 層理面・節理が発達し表層崩壊・岩盤崩壊など幅広い崩壊が多発する斜面をイメージ

◆ 事例

- ・2004年新潟県中越地震:竹沢地区
- ・2018年北海道胆振東部地震:日高幌内川周辺
- ・2024年能登半島地震:飯塚層珪質シルト岩の斜面崩壊

ほか中新世以降の層状岩盤中心に多数あり



■ Zone5

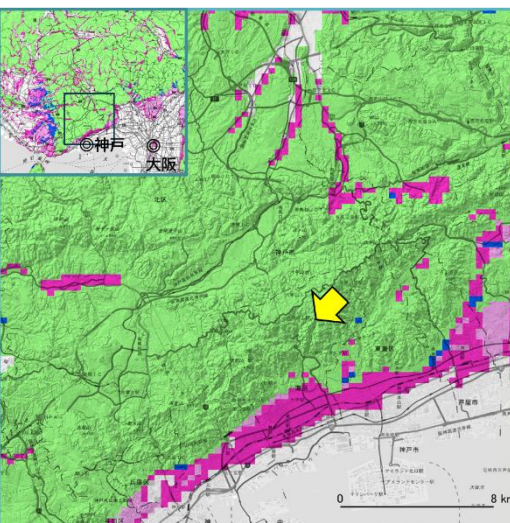
塊状岩盤の軟質岩による山地・丘陵性山地(テフラの影響が少ないもの)、あるいは層状岩盤の軟質岩による山地(Zone4より堅牢と考えられるもの)

◆ 一般的な軟質岩の山地をイメージ

◆ 事例

- ・2016年熊本地震:立野地区
- ・2024年能登半島地震:宝立山層等の火砕岩・火山岩の斜面崩壊

ほか中新世以降の火砕岩を含む地層での崩壊が顕著



■ Zone6

硬質岩・中硬質岩による山地・丘陵性山地および丘陵化した段丘・開析谷等

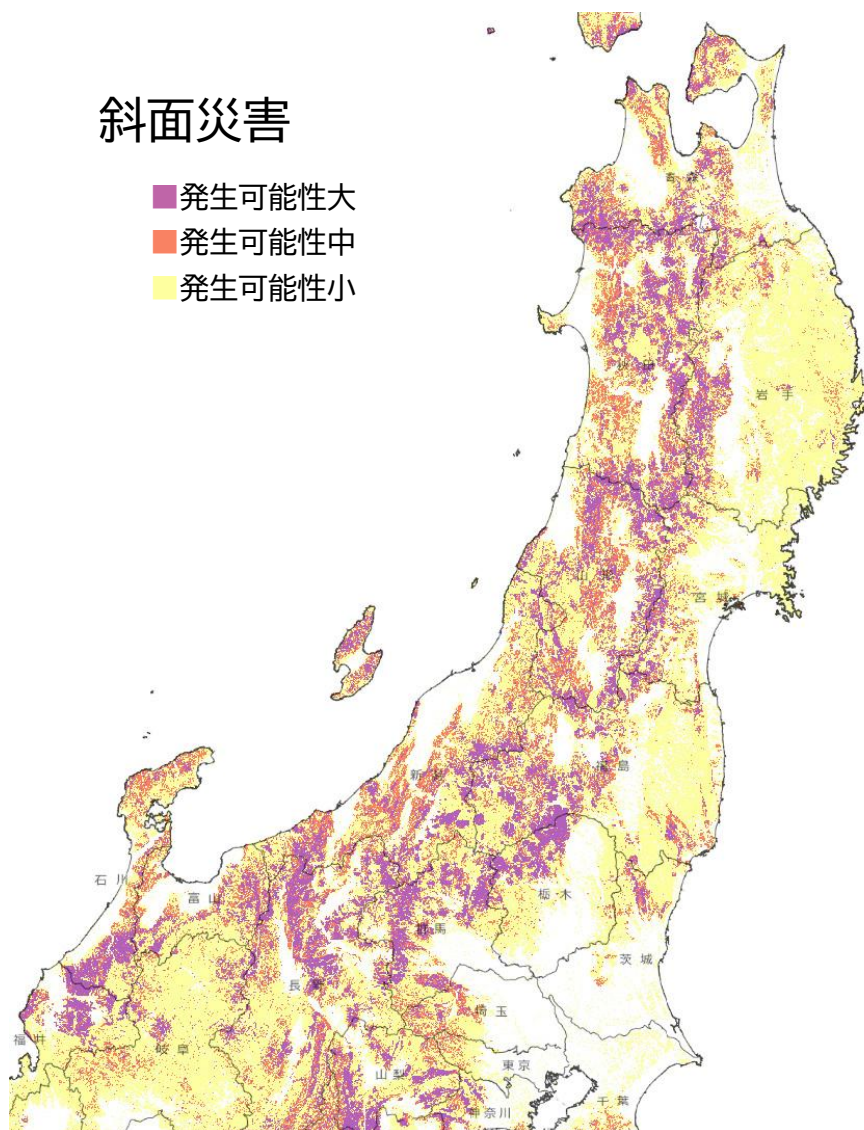
◆ 硬質～中硬質岩による比較的堅牢な岩盤をイメージ

◆ 事例:1995年兵庫県南部地震での六甲山地の斜面崩壊

全国一律に震度6弱とした場合のQGISを用いたシミュレーション事例(一部)

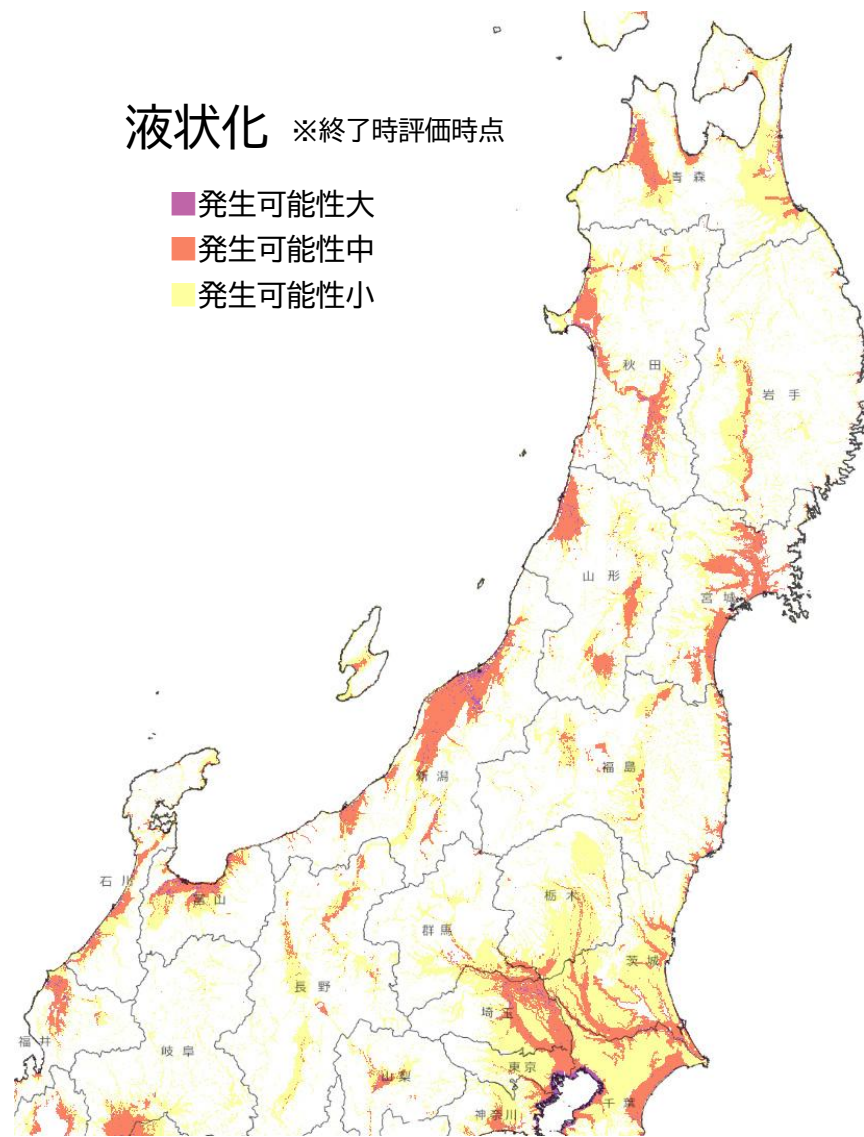
斜面災害

- 発生可能性大
- 発生可能性中
- 発生可能性小



液状化 ※終了時評価時点

- 発生可能性大
- 発生可能性中
- 発生可能性小



現在運用中のSGDAS

10年以上前の機材で高速計算を実現するために設計されており、

◆ 静的データを特殊なフォーマットで持っている

(日本全国を短冊状に切り分け40区画×解像度250m~4kmまでの5種類の解像度の各200個のRAWデータ(BIP))

◆ 数式等はプログラム本体にコーディングされている

(斜面災害の推計式、液状化の地形区分のグルーピングルール)

静的データの差替え、推計方式の変更が容易ではない



ゾーニングマップ方式のSGDAS

◆ 静的データは日本全国各1枚のGeoTIFF

(汎用GISで一般的なラスターデータ、解像度250m。凡例数はシステム上可変)

◆ 数式に相当する部分はCSVのマトリックス表

(エクセル等で作成可。表のサイズはシステム上可変)

GeoTIFFとCSVを設定ファイルとして外部化

静的データの差替え、推計方式の変更(マトリックス表の差替)が容易

- ・モジュール化より簡便で、推計時間は従来と同様
- ・汎用GISでも推計が容易に再現可

柔軟性・保守性の大幅な向上

斜面災害の研究に用いた地震データのリスト

発生年月日	地震名又は気象庁による震央地名※1	最大震度/マグニチュード	地震のタイプ	斜面崩壊・地すべりの災害実績図	インベントリ加工後のメッシュ数(うち崩壊メッシュ数)	地震動データ	用途(A:ゾーニングマップ方式モデル構築、B:精度検証)
1995-01-17	兵庫県南部地震	7/Mj7.3	内陸断層型・横ずれ断層	国土交通省(2013・2014)国土庁土地局(1999)	2852(638)	USGS Shakemapから換算した震度	A
2004-10-23	平成16年新潟県中越地震	7/Mj6.8	内陸断層型・逆断層	国土地理院(2005)	13662(4052)	250mメッシュ推計震度分布図(気象庁から提供)	A,B
2007-03-25	平成19年能登半島地震	6強/Mj6.9	内陸断層型・逆断層	国土技術政策総合研究所土砂災害研究部から提供	4713(66)	250mメッシュ推計震度分布図(気象庁から提供)	A,B
2007-07-16	平成19年新潟県中越沖地震	6強/Mj6.8	内陸断層型・逆断層	国土地理院(2007)	3886(122)	250mメッシュ推計震度分布図(気象庁から提供)	A,B
2008-06-14	平成20年岩手・宮城内陸地震	6強/Mj7.2	内陸断層型・逆断層	国土地理院(2009)	7070(1477)	250mメッシュ推計震度分布図(気象庁から提供)	A,B
2011-03-11	平成23年東北地方太平洋沖地震	7/Mj9	海溝型・逆断層	国土技術政策総合研究所土砂災害研究部より提供(栗駒山麓のみ)	6159(266)	1kmメッシュ推計震度分布図(気象業務支援センター配信)	A
2011-03-12	長野県北部	6強/Mj6.7	内陸断層型・逆断層	国土技術政策総合研究所土砂災害研究部より提供	1111(123)	1kmメッシュ推計震度分布図(気象業務支援センター配信)	A
2016-04-16	平成28年熊本地震	7/Mj7.3	内陸断層型・横ずれ断層	Sakai et al. (2022)(カルデラ内)※2, 防災科学技術研究所(2016)(カルデラ外)	80533(1268)	250mメッシュ推計震度分布図(気象庁から提供)	A,B
2018-09-06	平成30年北海道胆振東部地震	7/Mj6.7	内陸断層型・逆断層	山岸・岩橋(2020)※3	11903(3317)	250mメッシュ推計震度分布図(気象庁から提供)	A,B
2024-01-01	令和6年能登半島地震	7/Mj7.6	内陸断層型・逆断層	吉田(2025)※4	26748(9974)	250mメッシュ推計震度分布図(気象業務支援センター配信)	A,B

※1 スライド内では簡易表記として、西暦で揃えて2007年能登半島地震等と記している。

※2 オルソ空中写真と解像度1mの航空レーザ測量DEMの画像処理図が判読に利用された。

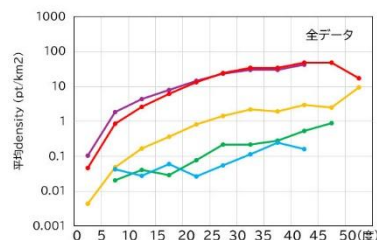
※3 判読は山岸による。空中写真(地理院地図)の他、北海道水産林務部による発災後の解像度2mの航空レーザ測量DEMを基にした地貌図(CBZ(株)シン技術コンサル変換・作成)の判読により作成された。なお、※2※3以外の災害実績図は、基本的に空中写真判読によって作成されたと考えられる。

※4 オルソ空中写真と解像度0.5mの航空レーザ測量DEMの画像処理図が判読に利用された。なお、※2※3※4以外の災害実績図は、基本的に空中写真判読によって作成されたと考えられる。

・災害実績図はいずれも岩橋ほか(2022)の手法により4分の1地域メッシュ(約250m四方)インベントリに集約して使用した。

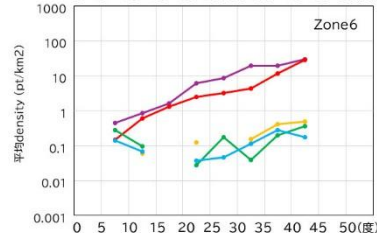
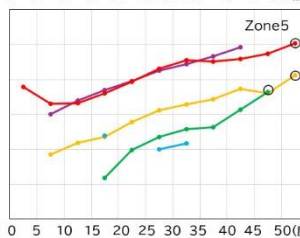
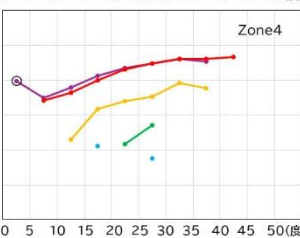
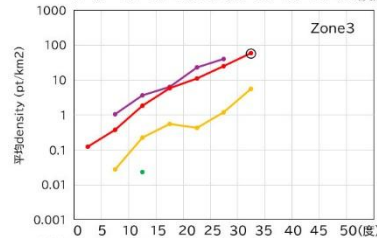
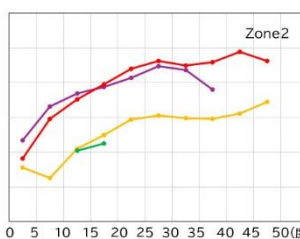
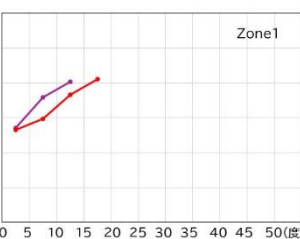
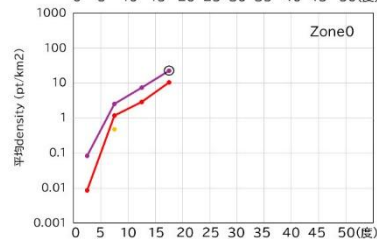
斜面災害(斜面崩壊・地すべり)実績値の集計グラフ

既往10地震(スライド44)における地震時斜面崩壊・地すべりの実績値の集計



全データおよび各ゾーンの震度帯-傾斜帯ごとの平均density
の実績表の折れ線グラフ(片対数)

縦軸は対数目盛のため、平均density0の点は表示されていない。
有効なサンプル数は5メッシュ以上とした。○で囲んでいる点はサンプル数10未
満。



6強以上
6弱
5強
5弱
4以下

250mメッシュ推計震度分布図の特徴？

- ◆ 震度7の平均densityが震度6強のそれより低い
→震度6強以上をまとめて集計
- ◆ 震度6と震度5の平均densityに大きなギャップ

個別の外れ値の影響は残っている

(いずれも広い平坦地と狭い急斜面が混在した
メッシュにおいて、急斜面部分で崩壊が発生したが
250mメッシュ単位では平均傾斜が低く見積もられ
た影響)

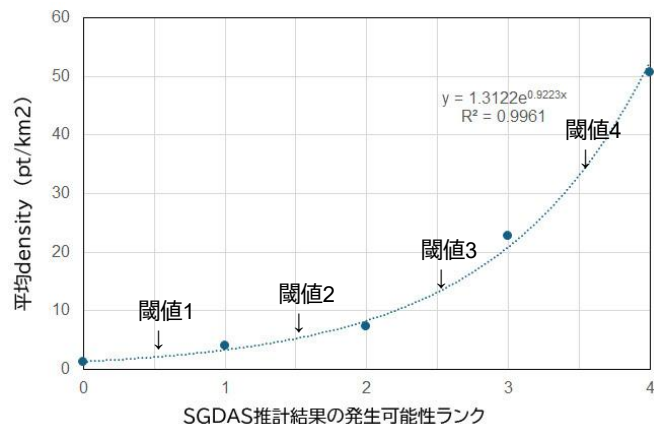
(おそらく)一つの関数には近似できない

- ◆ 未固結層(Zone0~2)は緩斜面から崩壊率が高
くなり急斜面では頭打ちになる傾向
- ◆ 岩盤(Zone3~6)では、少なくとも震度6では指
数的に増大

斜面災害(斜面崩壊・地すべり)発生可能性ランクへの変換閾値とルールセット

集計結果の発生可能性ランク(仮)への変換 ～閾値の設定～

近年の正確なインベントリを用いて得た値を基に、発生可能性ランクの閾値を設定



2024年能登半島地震のSGDAS推計結果の発生可能性ランクごとの平均崩壊密度(吉田(2025))を基にしたインベントリを利用)から閾値を作成

(現在のSGDASの出力図と、なるべく同規模の面積・似たイメージにするための設定)

SGDASレポートで

発生可能性大	発生可能性ランク4: 平均density33.11以上
発生可能性中	発生可能性ランク3: 平均density13.16以上33.11未満
発生可能性小	発生可能性ランク2: 平均density5.23以上13.16未満
	発生可能性ランク1: 平均density2.08以上5.23未満
	発生可能性ランク0: 平均density2.08(pt/km²)未満

最終的なマトリックス表作成のルールセット

1. 集計データが得られた傾斜帯について

- ・傾斜・震度の増大に応じた崩壊率増大傾向がある場合、閾値で発生可能性ランク(0~4)を決定。
- ・次のケースでランクを修正する。下位帯よりランクが小さい場合、同ランクに修正(①)。安全のため、特定条件(平均densityが閾値の半分以上でサンプル数10以上、または重要事象発生カテゴリ)でランク0を1に修正(②)。隣接するランク差が3以上の場合、極端なランク低下を防ぐためランク差2までに修正(③)。

2. 集計データが得られなかった傾斜帯について

- ・実績値の近似曲線(簡易な関数を用いる)を延長、または上下震度帯からの補間でランクを推定する。その際1の隣接ランク差修正ルールに従う。
- ・信頼性の低いデータや過小評価を防ぐため、高い方に振れた例外値はサンプル数10未満や緩斜面の場合に、低い方に振れた例外値はサンプル数によらず除外して推定しても良いこととする。

(閾値の設定方法や基本的なルールは液状化のマトリックス表作成でも踏襲)

震度帯-傾斜帯/発生可能性ランクのマトリックス表 その1

色の付いた文字: ルールセット(前頁)によって補正した発生可能性ランク。赤字:①、緑字:②、桃字:③

[illegible]

[illegible]

斜面災害 課題②-2への対応 補足資料

解析雨量の概要と新規開発手法による発生可能性ランクに解析雨量で加重したデータによる相関係数

解析雨量はメッシュデータから内挿補間した値。Sparemanの順位相関係数(Rs)が1%水準で有意なものは**, 5%水準で有意なものは*を記している。Rsの最大値右側に●を表示。

地震名	3日間雨量 最小-最大(平均)(mm) 加重Rs	7日間雨量 最小-最大(平均)(mm) 加重Rs	15日間雨量 最小-最大(平均)(mm) 加重Rs	30日間雨量 最小-最大(平均)(mm) 加重Rs	雨量を加えないRs
2024年能登半島地震	23 – 55 (37) 0.510**	41 – 87 (61) 0.515**	153 – 327 (208) 0.539** ●	276 – 509 (362) 0.537**	0.497**
2018年北海道胆振東部地震	15 – 77 (23) 0.454**	26 – 95 (43) 0.458**	64 – 192 (99) 0.473** ●	191 – 373 (256) 0.471**	0.434**
2016年熊本地震	0 – 21 (6) 0.178**	1 – 24 (7) 0.180**	48 – 156 (82) 0.189** ●	71 – 202 (112) 0.189** ●	0.184**
2008年岩手・宮城内陸地震	0 – 7 (1) 0.309**	0 – 27 (5) 0.102**	43 – 118 (84) 0.345**	156 – 584 (206) 0.396** ●	0.391**
2007年新潟県中越沖地震	24 – 40 (29) 0.143** ●	54 – 90 (68) 0.136**	77 – 133 (101) 0.137**	253 – 405 (321) 0.128**	0.134**
2007年能登半島地震	18 – 49 (33) -0.002	28 – 63 (47) 0.016	51 – 92 (73) 0.018	94 – 149 (123) 0.020	0.054** ●
2004年新潟県中越地震	43 – 101 (69) 0.453**	86 – 168 (124) 0.468**	163 – 273 (207) 0.476**	277 – 467 (334) 0.485**	0.493** ●

補足：PR-AUC、ROC-AUCについて（※機械学習・統計分野で頻出）

PR(適合率/再現率)曲線、ROC曲線

（参考文献：Davis and Goadrich, 2006；Saito & Rehmsmeier, 2015等）

Precision(適合率、精度) = $TP / (TP + FP)$

→発生と推計したメッシュのうち実際に発生メッシュであった割合

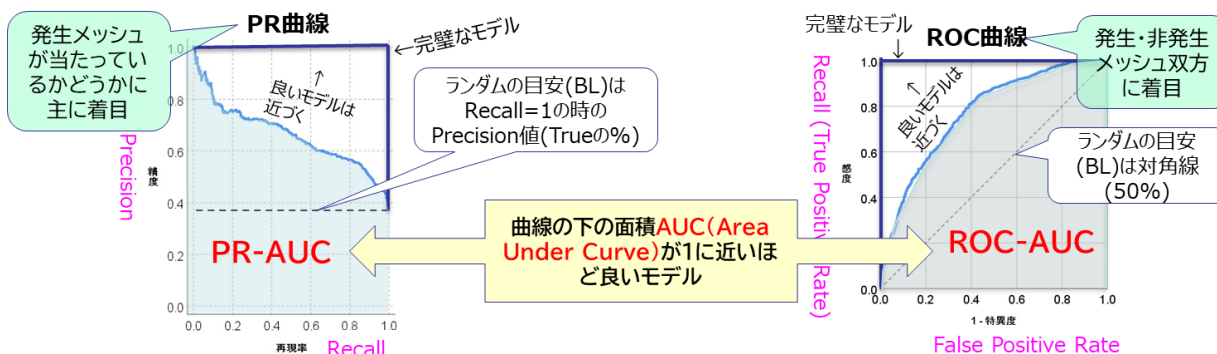
Recall(再現率、感度、真陽性率) = $TP / (TP + FN)$

→発生メッシュのうち正しく発生と推計した割合

False Positive Rate(1-特異度、偽陽性率) = $FP / (TN + FP)$

→非発生メッシュのうち間違えて発生と推計した割合

正解 \ 推計	発生と推計	非発生と推計
崩壊/液状化発生	True Positive (TP)	False Negative (FN)
崩壊/液状化非発生	False Positive (FP)	True Negative (TN)



- ① 正解の二値画像(True/False)と、確からしさ(崩壊危険度のような)を表す変数(A)を用意
- ② 閾値を変えながら次々Aを二値化して、都度のPrecision等を求めてプロットしていく
- ③ 曲線の下面積(AUC)を求める

	PR-AUC	ROC-AUC
着目点	True(崩壊/液状化の発生メッシュ)のみの当たり具合	True/False双方の当たり具合
ベースライン(BL)(=推計がランダム(無意味)に終わった時の数値)	Trueが全体に占める割合(5%なら0.05)	0.5
スコープ	Trueの割合が低い不均衡なデータ(大抵の地盤災害イベントリ)	True/Falseのメッシュ数が1:1に近いデータ
ほとんどがFalseであるデータ(地盤災害の発生個所の割合が非常に低いデータ)に対する適用	○	△(不確実性あり)(※2)
ユースケース	Trueの当たり具合が重要な時	True/False双方の当たり具合が重要な時
モデルの良否の目安(※1)	・BLを大きく上回るほど良い ・PR-AUCがBLの何倍となるかで評価する場合、1/BLが理論上の最高倍率	0.8以上 良好 0.7以上0.8未満 そこそこ 0.7未満 不十分 地盤災害分野で良好とされる値は一般に0.8前後(※3)

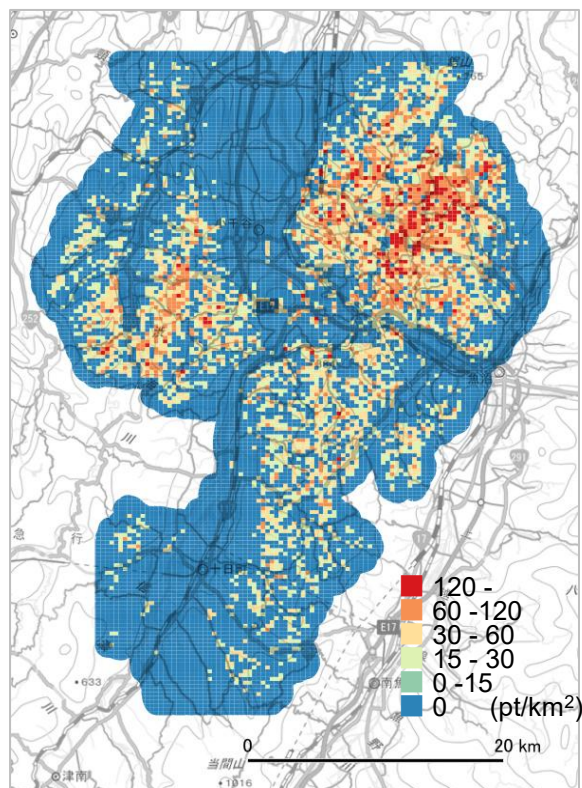
※1 理論的な数値は無く、経験的な目安

※2 本研究ではROC-AUCは崩壊/液状化メッシュが1000メッシュ以上のデータのみ算出

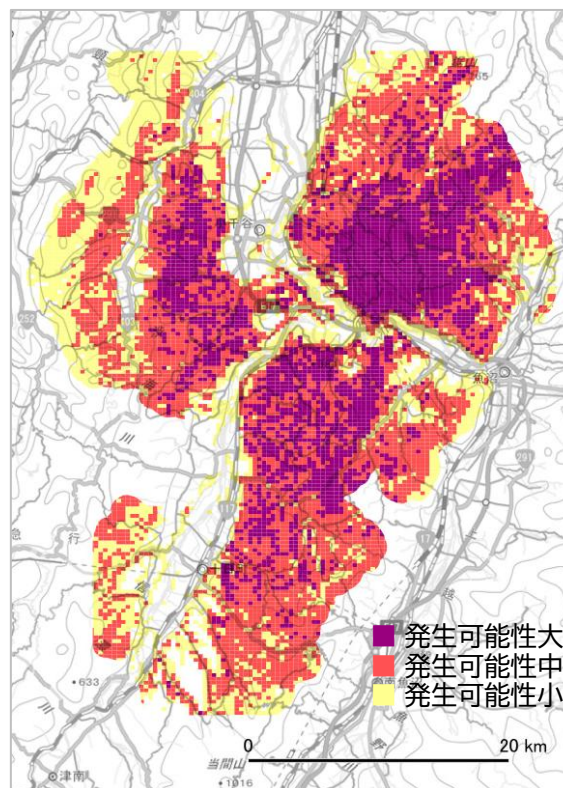
※3 Wang and Zhao(2025)

補足：2004年新潟県中越地震の斜面災害推計結果

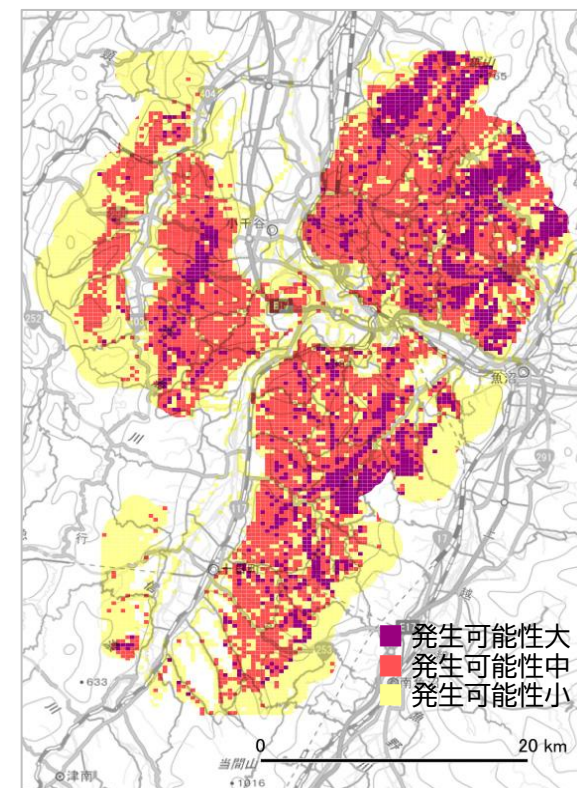
正解データ(崩壊密度)



a 現SGDASの設定



b 新方式



元データは国土地理院(2005)による

液状化の研究に用いた地震データのリスト

発生年月日	地震名又は気象庁による震央地名※1	最大震度/マグニチュード	地震のタイプ	液状化の災害実績図	インベントリ加工後のメッシュ数(うち液状化メッシュ数)	地震動データ	用途(A:モデル構築、B:精度検証)
2004-10-23	平成16年新潟県中越地震	7/Mj6.8	内陸断層型・逆断層	若松(2005)	38747(1679)	250mメッシュ推計震度分布図(気象庁から提供)	A,B
2007-07-16	平成19年新潟県中越沖地震	6強/Mj6.8	内陸断層型・逆断層	国土地理院(2007)	3891(134)	250mメッシュ推計震度分布図(気象庁から提供)	A,B
2011-03-11	平成23年東北地方太平洋沖地震	7/Mj9	海溝型・逆断層	国土交通省関東地方整備局・地盤工学会(2011)(関東地方のみ)	475253(2498)	1kmメッシュ推計震度分布図(気象業務支援センター配信)	A
2016-04-16	平成28年熊本地震	7/Mj7.3	内陸断層型・横ずれ断層	若松ほか(2017)※2	27440(1898)	250mメッシュ推計震度分布図(気象庁から提供)	A,B
2016-10-21	平成28年鳥取県中部の地震	6弱/Mj6.6	内陸断層型・横ずれ断層	先名・小澤(2019), 先名ほか(2021)※2	5458(78)	250mメッシュ推計震度分布図(気象庁から提供)	A,B
2018-09-06	平成30年北海道胆振東部地震	7/Mj6.7	内陸断層型・逆断層	先名・小澤(2019), 先名ほか(2021)※2	68784(1171)	250mメッシュ推計震度分布図(気象庁から提供)	A,B
2024-01-01	令和6年能登半島地震	7/Mj7.6	内陸断層型・逆断層	先名(2025)※2	125850(1853)	250mメッシュ推計震度分布図(気象業務支援センター配信)	A,B

※1 簡易表記として、西暦で揃えて2004年新潟県中越地震等と記している。

※2防災科学技術研究所からJ-SHIS Labsにて公開されている液状化履歴地図(<https://www.j-shis.bosai.go.jp/labs/liqmap/>)として4分の1地域メッシュ単位で取りまとめられたGISデータを利用した。判読範囲については、判読に使用された地理院地図のオルソ画像等の範囲や、液状化メッシュが分布する地域メッシュの領域から推測した。

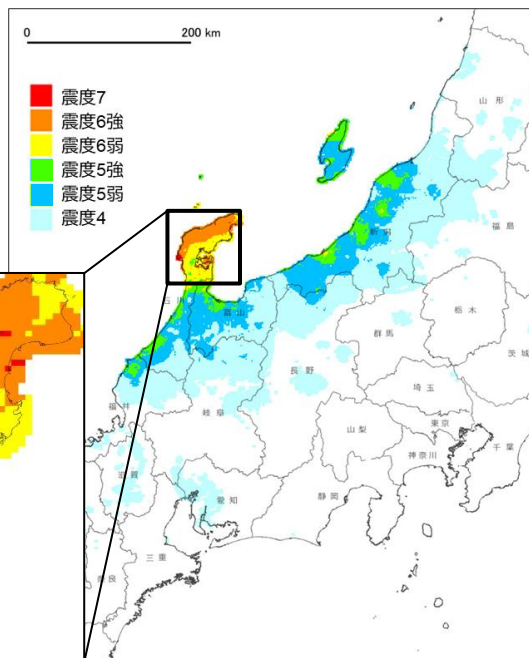
(※2以外のデータは、岩橋ほか(2022)の手法により4分の1地域メッシュ(約250m四方)インベントリに集約して使用した。)

250mメッシュ推計震度分布図(気象庁)について

気象庁の推計震度分布図が250mメッシュに

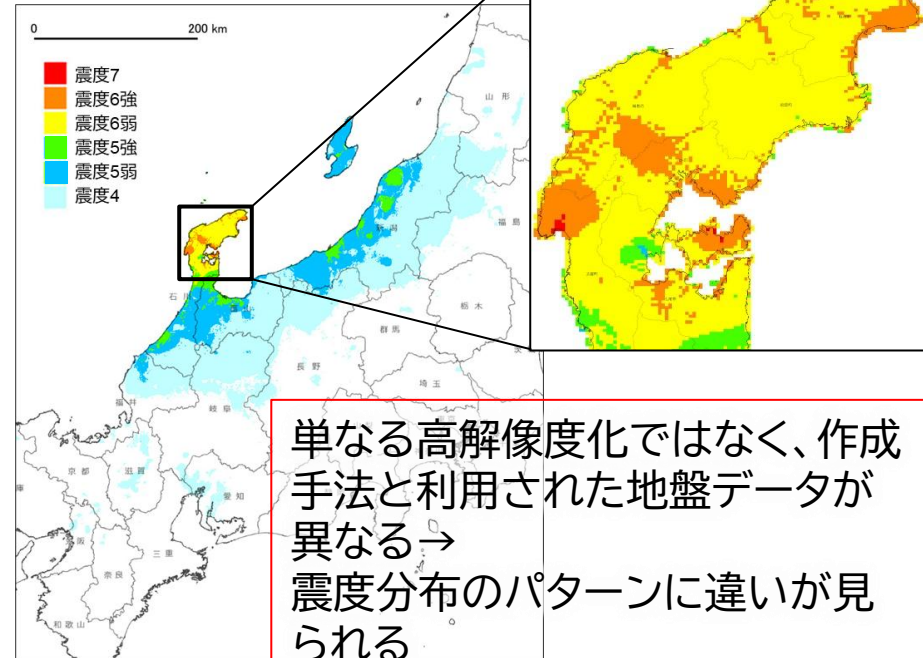
1kmメッシュ推計震度分布図(2004年11月11日～オンライン提供開始)が、長らくSGDASで使用されてきたが、2023年1月1日より250mメッシュ推計震度分布図が提供開始。

【1kmメッシュ推計震度分布図】



(R6能登半島地震・
2024年1月1日16:10)

【250mメッシュ推計震度分布図】



- ◆ 対応するためのシステム改修を令和5年度に行い、2025年1月から地震動の入力データとして使用を開始
- ◆ 本データはじめ、地質図等の、この間のリニューアルに合わせた新モデルを構築
- ◆ 最終的な精度評価は250mメッシュ推計震度分布図を用いて令和7(2025)年度に実施(岩橋・遠藤,2026) (実際に使用するデータを用いた再評価で、精度向上の確実性を確保)